

日本を見つめ直し、楽しく生活、仕事しましょ、シリーズ。

明治維新は、欧米列強国の東アジア植民化から日本の独立を守るため、世界史でも稀な自ら既得権益を廃し、国の形を変える形でおこなわれました。

そして、当時最大の脅威は1858年の幕末からすでに始まっていたロシアの南下政策<sup>図2 ※1</sup>で、すでに朝鮮半島に接する状況になり、1861年、ロシア軍対馬占領事件<sup>※2</sup>がおこっていました。

※1 植民地どころかロシアの国土として編入されること

※2 ロシアは対馬港湾の永久租借（実質的な植民地化）を要求しました。幕府は排除する力がなく当時天敵であったイギリスの力で退去させるまで約半年間占領された事件です。

さし迫ったロシアの驚異に対して、日本が国土防衛のために、最重要と考えたのが朝鮮半島でした。しかし、朝鮮は19世紀初めから国内の内部対立、内乱が頻発し経済、王権が衰退し、当時清の冊封体制<sup>※3</sup>下の属国として防衛のみならず国内の治安維持まで清に頼る弱体化した状況でした。

※3 宗主国と君臣関係になり徴兵されることもあるが、外敵から守ってもらえるしくみ。

この状況において明治政府は、朝鮮の国力、防衛力を高めるには日本の指導下に近代化を進め、清から独立させなければならないと考えていました。

ここに、欧米列強に対するために、社会制度全体の西洋化による国力の増大に舵をきった日本と、社会制度を維持したまま、軍事力を主に増強させ冊封制度を維持しようとする清。軍事的に重要な不凍港やより暖かい土地を求め領土拡張の野心を進めるロシアの対立構造が発生しました。

当時ヨーロッパ列強国は、都市を租借（実質的な植民地化）し清の了解を得れば周辺国の利権を得ることができる影響力<sup>※4</sup>を利用して交易の利益を計る手法をとっていました。 ※4 華夷秩序といいます。

明治27年、朝鮮への主導権をめぐって朝鮮に出兵していた日本軍と清軍の間で戦闘が始まった日清戦争は、約10ヶ月の短い戦いで日本が勝つことになります。しかし、当時中国は東アジア最強の国と認識されており、清の兵力108万人日本の兵力7万8000人で14対1、清の軍艦82隻、日本28隻と圧倒的な戦力の違いがあり、日本が勝つと世界は思っていないでした。 ※5

※5 当の伊藤博文首相も勝つ自信がありませんでした。

日本が勝ったことで、西洋に学ぶ政策が正しいことが証明され、清の弱体が明らかと判断した欧米列強国は一気に清の分割植民化を進めます。

戦後の日清間で締結された下関条約第1条、“清は朝鮮が完全な独立国であることを承認する”にあるとおり、朝鮮は清を離れて独立国となりました。しかし歴史が証明しているとおりのうまくいきませんでした。



図1 幕末アヘン戦争前

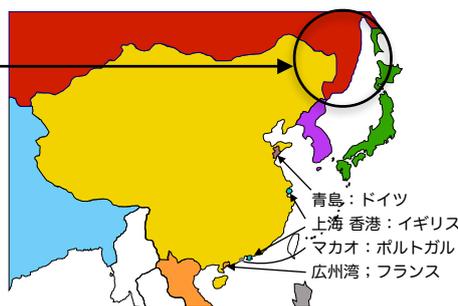


図2 幕末アヘン戦争後



図3 日清戦争後 日露戦争前